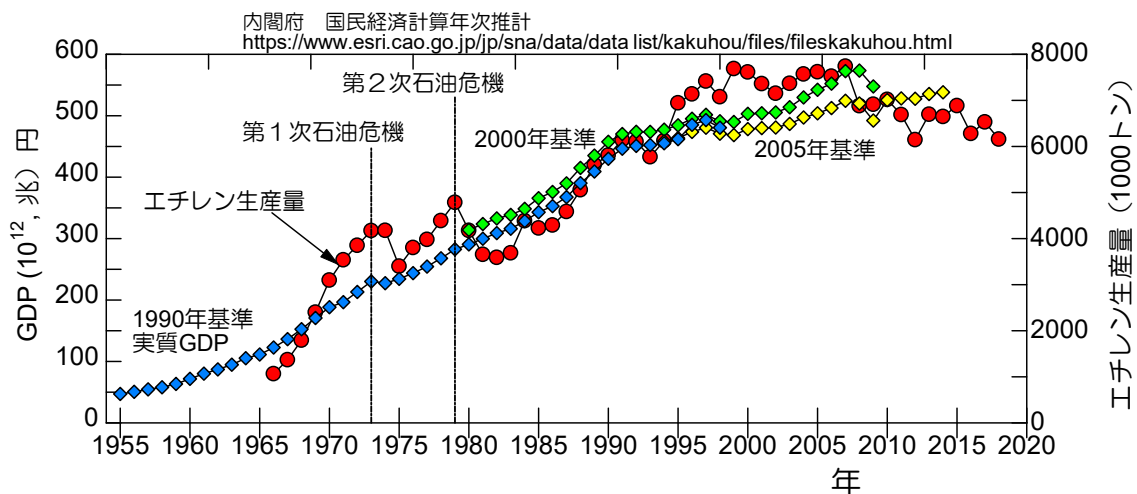


ホルムズ海峡波高し

関西大学社会安全研究センター 小澤 守

我が国は原油のほとんど、ならびに蒸留してできるナフサの6割程度を海外に依存している。それも中東の比率が高い。これらが何らかの原因で国内に入ってくないとすれば、国内の化学産業のみならず我々の生活さえも非常に強く脅かされる。まさしく今回のホルムズ海峡問題は国難と言える。ナフサは国内で4割程度生産しているそうだが、原油自体が入らなければその製造もできなくなる。つまりホルムズ海峡封鎖は、我が国の首根っこをおさえているということである。下図はかつて筆者の研究室に在籍した大学院生が修士論文中に用いた図面に多少手を加えたものである。ナフサを熱分解してできるエチレン（モノマー）に熱や圧力を加え、重合反応によって連結させてできる高分子（ポリマー）がポリエチレン（PE）で、所謂プラスチックのもとになる。エチレンのほとんどは国内で生産されているが、その生産量は実際にはスケールを適宜合わせて表示すると、図に示すように我が国のGDPの傾向にほぼ一致しており、第1次、第2次石油危機の際にエチレン生産量が低下しているのは象徴的である。当時の石油備蓄量はせいぜい50～60日分であったそうだが、現在では民間備蓄、国家備蓄合わせて8か月程度というのが公式情報だ。



さて、問題はたかだか建国250年の国の大統領が、いろいろな事情があったにせよ2500年以上の歴史を持つ国に手出しをしてしまったことにある。政治向きの議論をするつもりはないが、自国の強大な軍隊の指揮権を有することから、簡単に降伏させられると考えていたのだろう。ところが全くの予想外にホルムズ海峡を押さえられ、中東に原油やナフサを大きく依存していた日本をはじめ世界中の国々を混乱に陥れてしまった。ミツバチ程度に思って巣をつついたら何のことはないスズメバチであったというところか。

エネルギー資源を過度に特定国に集中すべきではないことはかつての石油危機で学んだはずなのに、依然として従来通りの形態を維持してきた我が国は、エネルギーだけでなく化学素材であるナフサまでもがスムーズに入らなくなってきた現実慌てているように見える。神戸市などがゴミ袋を指定袋でなくてもよいとの臨時の対応を取るようになったのもその一例である。ただし

中身がおおよそ見える程度の袋とすることという。これも一つの対応とは思いますが、ずいぶん昔のように、紙袋でもなんでもよいのでまとまっていることというところまで戻してもいいのではないか。ごみの分別ルールを破る行為は避けなければならないし、鳥の襲撃も避けなければならないのは言うまでもない。つまり地下資源である貴重な石油由来の材料を使わなくてもいい方法を考えてはどうかということ。石油の備蓄があるといってもその量にも限界があり、手打ちがいつ終わるか見通せないなか、世界は極めて危険なゲームに巻き込まれたように思えてならないからである。

ごく最近まで、CO₂排出量削減のために太陽光、風車による発電を広く推し進めてきたが、いまやすっかり様子が変わって、ホルムズ海峡封鎖問題の影響緩和に資するとのうたい文句も出てきそう。高効率機器や消費電力を低下させる努力の一方で、AI利用のためのデータセンターによる発電容量の増加など、エネルギーや資源を取り巻く環境は極めて複雑化してきた。

今回のホルムズ海峡封鎖問題は、石油をはじめとするエネルギー資源は戦略物資であることを改めて明らかにした。我が国において、少なくとも石油に関して海外依存しか方法がないなかでは、本気でエネルギー戦略、同時に素材戦略を立て、どこかの大統領や首相に振り回されることが極力少なくなるようにしなければならない。世界情勢を冷徹な目で見通し、国民の理解を得ながらその戦略を推進する政府であってほしい。ナフサ由来のエチレンなど素材の原料としての石油についてはどうするのか。しっかりと確保できる目途が立つだけでは不十分で、素材としてのあり方も含めて、つまりは我が国の全産業のあり方について包括的にベターな解を見出す努力が欠かせない。発売以来60年の歴史のあるスナック菓子の袋の印刷が白黒になったと面白がっている場合ではないのである。